

欲生心の象徴的自覚

2

本多弘之

honda hiroyuki

人間の歴史は、理性によってより良い社会や、より住みやすい環境を作り、進歩発展していくものであるとする見方に対し、仏教には「末法史観」と言われる見方がある。釈尊の生きておられた時代を正法しょうぽうと言い、時代の経つにつれ、像法ざうぽう（仏像や堂塔などの形のみになった時代）、さらには末法（経は残っているが、それを本当に実践したり証したりす

る人がいなくなっていく時代）と成っていくとされ、正法の時代は仏滅後五百年まで続き、以後像法の時代となり、さらに一千年も経つと末法の時代に入るのだという説である。要するに、時代が経つと共に機根が衰え、人間もそれを取り巻く情況も、だんだん生きにくく住みにくい時代になっていくという見方である。この見方は、理想主義的人間像を求め

ている人からは嫌われるかもしれないが、確かに人間の歴史の一面をしっかりと言い当てているように思う。

もっとも、親鸞の人間観からすれば、いつの時代であろうとも、根源的には人間は愚かな凡夫であることを逃れられないのであるから、「正像末の三時には 弥陀の本願ひろまれり」ということも言えるのであろう。しか



し、末法に入ってからすでに千五百年に近づいている現代において、文明社会の困難な状態は、この仏法が言い当てた「末法五濁」の現代における顕現なのではないか。してみると、この状況を五濁の現れとして、人間社会の根本問題を見極めるように受けとめることも、可能なのではないか。

先回触れたように、親鸞は三恒河沙の諸仏のみもとで、菩提心を起こして流転してきた、と自分の現在の位置を表現している。これは人間存在が基本的に「宗教的関心」を深く持続して生きてきているのだという自覚の表現なのだと思う。善導は有名な「二河譬」を始めるとあって、「人あり、西に向かいて行かん」と欲すと書いてある。西とは人生の終末を日の入る方向で示しているであろう。そちらに向いて歩む存在というところに、人間が有限な寿命を与えられ、その短い生命のなかに、深く自己の意味を求める存在であることを象徴しているのではないか。

この感覚は、単に物質的な便利さや、経済的な有利さには、解消できない課題をもつのが人間存在であることを示しているのである。ここに理想主義的歴史観を批判して、正像末史観を提出するのは、単に人間存在に希望をもてないからということではなく、人間存在の本質をしっかりと見極めつつも、有限な存在に限りない慈愛を掛けている仏陀の見

方を学びたいからなのである。

● 善導は、二河の譬喩において、この譬喩を通して「信心を守護」するのだと言う。「貪瞋二河」の前に人生の危機的状態を見だし、ここを逃げる事ができない「三定死」(「回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん」)の場面だと気づいて、貪瞋二河に墮ちる危険を顧みず、前に向かって往こうとするとき、二河の中に一筋の狭い道(白道)を発見する。それは「衆生貪瞋煩惱中、能生清淨願往生心」を警えるのだという。この「貪瞋煩惱中」ということと、そのただなかに、「清淨の願心」を生ずるということが大事などころではないであろうか。

「貪瞋煩惱」を具足して生きているのが、凡夫たるわれら衆生である。煩惱を消したり断滅したりして、理想のあり方に成ろうとする方向の要求を、「堅」の菩提心と親鸞は言う。それに対して、煩惱を具足しながら大涅槃に至る道を、「横」の菩提心と言う。この横の菩提心の譬喩が、「貪瞋煩惱中」に生ずる「清淨願心」であり、これは「金剛の真心を獲得する」ことの喩えだと言う。

煩惱が人間の生活を乱し汚してくるから、こういう問題を解消することによって、より良い人間に成るといふのなら、誰でもすぐわかる話である。だから、堅ということとは、こ

の世の人情の一般の人間理解に近いのである。ところが、煩惱というやっかいな問題をそのままにして、しかも「大般涅槃」という仏陀の畢竟の利益を獲得できる方向があることを信ずるのが、横の菩提心だといふのである。これは実に理解しにくいことである。人間は、自己の抜きがたい煩惱の心理を何とか超えられると思っている。けれども、その思考法に止まる限りは、先の譬喩の三定死を覚悟していかない状態なのである。三定死とは、この世の絶望をくぐるなら、いかに狭い道であろうとも、一筋の白道に決心して立つしかない。これが「本願の信心」なのだ、というのである。これを信ずることは、自力執心に縛られている衆生には、ほとんど不可能である。だからこれを、「極難信」と言う。

この極難信を成り立たせる三定死の見極めと、この世が「五濁悪世」であり、末法なのだ、ということとが、深く通底しているのではなからうか。個人としての「死」の覚悟と時代状況としての「五濁」の見極めとは、その問題の根源が通じていると感じられるのである。このことは、生きることに付帯する根源悪の自覚が通底することなのかもしれない。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長
近著「親鸞」と「悪」―われら極悪深重の衆生― 春秋社)